

企業活性、地方創生、イノベーション

月刊 事業構想

PROJECT DESIGN

大特集

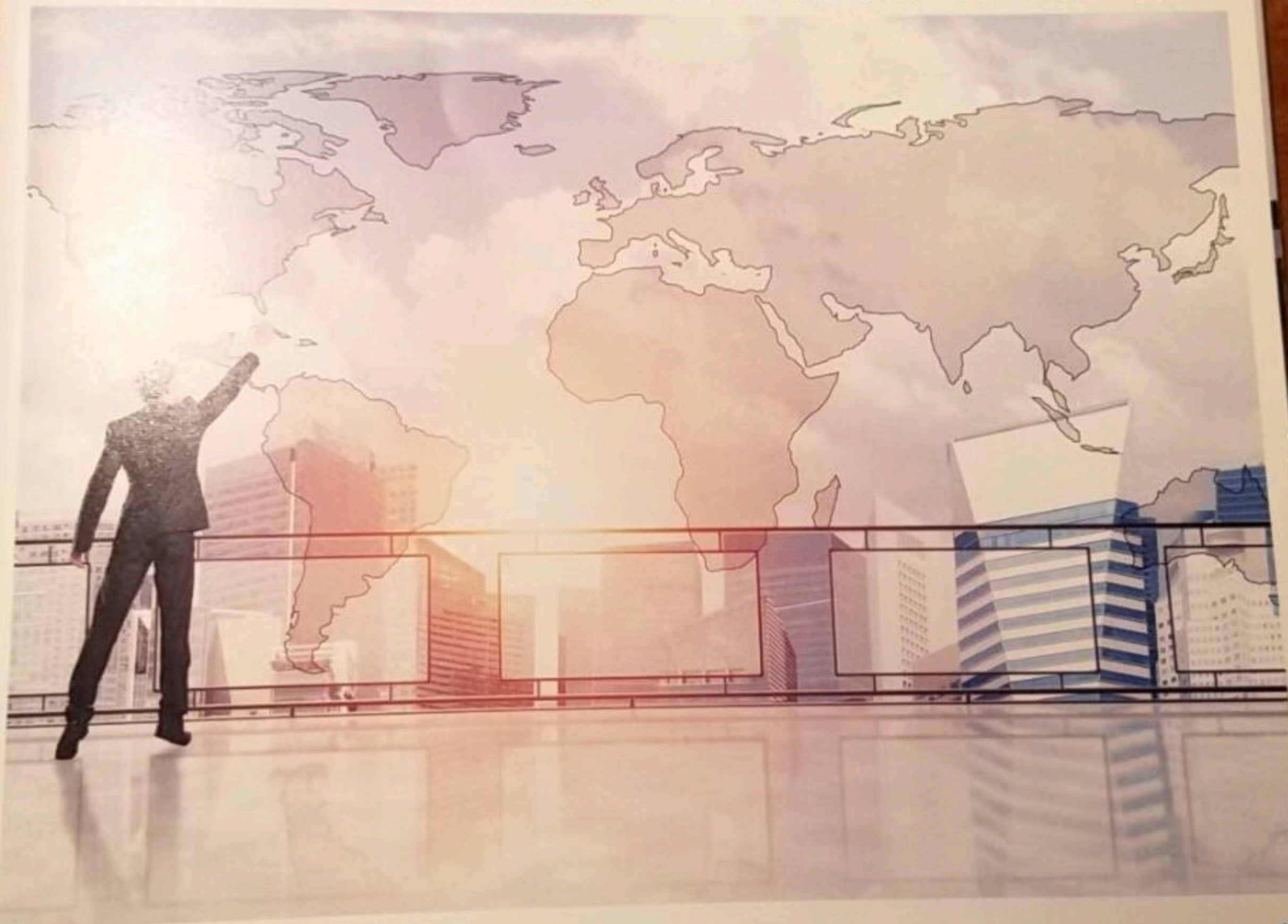
コロナ禍で登場した起業家 新ビジネスとその特徴

鳥取県特集 哲学実践・地域活性 平井伸治知事
副業・兼業で関係人口が大幅増加した舞台裏

特別企画 SDGs未来会議/
シティプロモーション・フォーラム

1

JANUARY
2021



トップインタビュー 発展の礎と構想を訊く

阪急阪神ホールディングス・角和夫会長 / SBIホールディングス・北尾吉孝社長 /
セイコーエプソン・小川 恭範社長 / クボタ・北尾 裕一社長 / 国分グループ・国分晃社長 ほか

SIAA
ISO 22196
抗菌加工
発行所：SIAA
〒650-0001 大阪府大阪市東区
東船場1-1-1 SIAAビル

全国シニアサッカー大会

「真剣に遊ぶ大人」に活躍の場を

11月、福島県楢葉町のJヴィレッジで、「第1回全国シニアサッカー大会」が開催された。発起人の中村篤次郎氏は、JリーグクラブでGMを務めた経験を持つ。地域とシニアサッカーの活性化を目指す中村氏に構想を聞いた。

シニアに「真剣な遊び場」を提供 サッカーの聖地の再生にも貢献

「全国シニアサッカー大会」は、39歳以上の選手で構成される12のシニアチームを集めた大会だ。シニアを対象にした全国大会としては、日本サッカー協会(JFA)が開催する「全日本O-40サッカー大会」があるが、その“裏”として、新たに企画された大会である。

発起人の中村篤次郎氏は、大会の目的は2つあると語る。「まず、大人たちに真剣に遊ぶ場を提供したかったのです。40歳を過ぎれば子育ても一区切りついて、外に出やすくなります。家族の理解を得ながら遊べる場所があって、年齢やレベルに応じて楽しく真剣に遊べば、ストレスの解消にもなりますし仕事に繋がる出会いもあります」

もうひとつの目的が地域活性化だ。「このところ全国で災害が相次ぎ、疲弊している地域も多いなか、何かできることはないかと考えました。裏選手権の会場である福島県楢葉町のJヴィレッジは、これまで原発事故対応の前線基地として使われていましたが、一定の目処が付き、ようやくピッチが使



11月、福島県楢葉町のJヴィレッジで開催された「第1回全国シニアサッカー大会」

えるようになりました。そのタイミングで何かお手伝いしたいと思ったのです」

中村氏は、事業用不動産会社の金沢営業所の責任者をしながら市の街づくり・活性化事業などにも携わった。2005年には、石川フットボールクラブ(現J2・ツエーゲン金沢)を立ち上げ、GMとして総合型地域スポーツクラブのあるべき姿を追求した。自身もアマチュアプレイヤーであり、石川県代表として北信越大会に出場しながらその先へ進めない悔しさを何度も味わってきた。全国のシニア選手たちが、

多忙な日々の中でいかにハードトレーニングを積んでいるのかも知っている。

「コツコツ練習を重ねるそうしたシニア選手たちの活躍の場は、あまりにも少ない。ならば、新たに大会を作ってしまうと考えたのです。“裏”選手権という通称には、長い歴史を持つJFA主催大会へのリスペクトがあります。まずはJFAの大会を目指していただき、残念ながら出場が叶わなければ、我々の大会への出場可能性があるという位置づけです」

立ち上げに当たっては、地域と密接に関わる不動産業務を通じて得た知見

の面づくりのノウハウ、スポーツ界やビジネス界で築いた広い人脈を惜しみなく活用した。全国の強豪チームを調べて声をかけ、立ち上げに加わってくれた二人の協力者と協賛企業集めにも奔走。多くの企業が大会趣旨に賛同し支援をしてくれている。

万全の態勢で迎えた第1回大会は昨年10月に開催される予定だったが、大型台風により開催が叶わず、今年11月の大会が事実上の第1回となった。偶然、JFA主催の大会と同会場になったことから日程を1週間遅らせたが、JFAの大会を目指してきたシニアチームのためにも、同日程で行なうことを当初からのコンセプトにしている。

シニア大会の先にある 地域スポーツクラブの未来

第1回目の開催にこぎ着けた今、中村氏の目は大会の今後に向いている。将来的には福島に限らず、地震や大雨などに見舞われた地域で適切な時期に大会を開催することで地域活性化を図る。ゆくゆくは、この大会を土台にJクラブをも巻き込んだ、よりスケールの大きな地域貢献システムへと発展させる。それが中村氏の構想で、すでにさまざまな組織と連携する準備を整え

中村 篤次郎 (なかもら あつお)

全国シニアサッカー大会 発起人プロデューサー
大学卒業後、生駒商事(現CBRE)に入社し2002年から北陸3県の業務責任者となり、金沢市都心圏わい回遊委員などとして地域活性化にも取り組む。2005年、石川フットボールクラブ(現ツエーゲン金沢)GMとしてチーム立ち上げに奔走し、2007年からFC東京営業部サブマネージャー。2010年からメットライフ生命保険エグゼクティブコンサルタント兼プレーイングマネージャー。



ている。

「さしあたって来年度は、JリーグOBチームを招聘したいと考えています。真剣にトレーニングに励んでいるオーバー40を相手に、元プロたちの気持ちにも、火がつくはずですよ。そしてゆくゆくはJクラブにもシニアチームを作ってほしいのです。現在、U18やU15、キッズなどアンダーカテゴリーは充実していますが、40歳以上のシニアチームは一つもありません。それがあって初めて、総合型地域スポーツクラブと言えるようになるのではないのでしょうか。将来的には、Jクラブのシニア選手権のような大会で、プロを引退した選手が、原点に立ち返って、楽しみながらアマチュアとしてプレーする。そうすれば、全国にある各クラブのサポーターも盛り上がるはずですよ」

中村氏によれば、ヨーロッパなどで

は年齢を問わず誰もがボールを蹴って楽しむ日常があり、クラブにもオーバーカテゴリーのチームがあるという。日本でシニアチームの活躍の場が広がって、海外のシニアチームとの交流も進めば、その先にはシニアチームによるワールドカップ開催という未来も見えてくる。

「いわば日本の“裏”代表のような形でシニアチームに海外遠征していただく計画も温めています。今回のオムロンヘルスケアさんのように今後も旅行会社や航空会社、グローバル企業など様々な方面に価値を感じて頂きご支援をお願いしながら、民間だからできることを最大限追求していきたいと思っています」

中村氏は今、そうした壮大な構想の実現に向けて動き出す一方、例えば交通費の捻出にも苦勞しているチームのために、地元のドラッグストアチェーンに支援を依頼するなど、双方に相効果のある運営方法なども模索している。

地域全体で支えるアマチュアのシニアチームが、やがて世界を舞台に活躍する。そんな新しい形のシニアサッカー大会の未来を思い描きながら剣に遊ぶ大人たちを応援する中村氏は、ますます広がっている。



大会には全国から12の強豪チームが参加。将来はJリーグOBも招聘したいという